［研究ノート］

現代ロシアにおける呪術の語り
エネルギー、バイオフィールド、インフォメーション、コード、プログラム

藤　原　潤　子

はじめに

最強の呪術師。どんな問題も解決します!
呪い祓います。効果は100%保証!!

現在、ロシアの新聞の広告欄には連日、このような文字がおどる。また、書店に行けば、「実用書」としての呪術書があふれる。それらはkoldun/ koldun'ia、znakhar'/ znakharkaなどを自称する者による著作で、恋の呪文、邪視よけの呪文、各種病気治療の呪文など、生活のありとあらゆる場面で「役立つ」呪文及び呪術儀礼が満載されている。

筆者はかつて、ソ連時代に呪術はあった/なかった、という相反する認識が現在のロシアにおいて混在すること、また、自分は呪術を信じていると認識する人/信じていないと認識する人の双方が存在することを論じた。ソ連時代、呪術は禁じられてはいたが、一部では実践的知識として密かに伝えられていた。身近に呪術を知る人がおり、日常生活で当たり前に呪術が利用されていた場合、ソ連時代にも呪術はあったと認識される。一方、そのような人がいなかった場合、唯物論教育のせいもあって、呪術はなかったと認識されるのである。これに対応して、呪術を行う者も大きくふたつのタイプにわかれる。呪術を自明のものとして扱う者と、そうでない者である。前者のタイプにとって、呪術はその効力を論じるまでもなく当たり前のものである。一方、後者のタイプは、なぜ呪文が効力を発するのかをさかんに説明したがり、呪術の実在性の「証明」を試みたりもする(1)。本稿で取り上げるのは、近年現れた、この後者のタイプによる呪術の原理に関する語りである。

アフリカをフィールドとして呪術研究を行っている阿部年晴は、呪術研究の歴史と課題に関する論考で次のように述べている。すなわち、文化人類学の研究において「当事者の観点」に注目することは基本的なアプローチであるにもかかわらず、呪術研究においてはきわめて不十分であり、内在的主観的なアプローチはほとんど見られない。この理由のひとつは、呪術の当事者は自分たちの行為について、なぜという問いを発しないからであると言われる(2)。つまり、呪文は効くから効くのであり、なぜ効くのかは問われない。なぜ、ある一

1　呪術に関する相反する認識、及び呪術をめぐる現状については、以下を参照のこと:藤原潤子「現代ロシアにおける呪術の媒体とその機能：活字化された呪術書をめぐる今日的状況」『説話・伝承学』12号、2004年発行予定。

2　阿部年晴「日常生活の中の呪術：文化人類学における呪術研究の課題」『民族学研究』第62-3号、1997年、348頁。

定の手続きをふめば呪いをかけたことになるのかも問われない。アフリカのドゥルマ族を例として「秩序の方法」を論じた浜本満が述べているように、同語反復以外に説明の不可能なこのような行為は、根拠など問わずにそういうものとして受け入れるしかない、行為の定まったやり方、その作法である。しかし、この問答無用の自明性、必然性は、一方で根拠づけしようのない恣意的な結びつきであることの裏返しでもある。その根源的無根拠性が、根拠の問いそのものを封印してしまう[3]。

現在ロシアにおいて、呪術は一方で説明不要なものとして存在し続けながら、他方で説明を要するものとして扱われている。浜本が指摘する「根拠のない恣意性」は、それを自明とみなす秩序の外に出てしまえば、実に不可解で非論理的に見えるものである。その結果、呪術における原因と結果の関係も、信じるに足らない迷信になり下がって当然である。ところが現代ロシアにおいては、詳細な説明を伴う呪術も大きな効力を持つものとして扱われているのである。

呪術が「信仰・観念の体系[4]」であり、呪術が呪術たる所以が、この体系が支える「根拠のない恣意性」にあるとすれば、説明を伴う呪術はこれまでとは異なる自明性を新たに獲得し、非論理性を克服したことになる。現在ロシアでは呪術ブームともいえる状況にあるが、では、ソ連時代に唯物論教育を受けてきた者にさえ時に説得力を持つ、この新たな自明性とはどのようなものだろうか。結論から言えば、それは「科学」の自明性である。呪術は「科学」であると主張することによって、生き延びることに成功している。本稿の目的は、呪術がいかにしてこの「科学性」を獲得したかを明らかにすることである。

呪術が「科学的」に語られる際に頻出するのが「エネルギー」、「バイオフィールド」などの用語である。これらの言葉は、革命前の民族誌には呪術の当事者（呪術をかける者、呪術をかけられる者、呪術を解く者、その他呪術を信じる者）の言葉として登場することはまずなかったが、現在では呪術の原理の説明として、日常的に一般の人々の口からも出てくる。上記用語が呪術以外のどのような日常的な文脈と交差するのかを検証することで、「科学性」獲得のプロセスが明らかになるだろう。以下、1章では19世紀～20世紀初頭の資料から、「伝統的」な呪術の自明性を概観する。2章では、新たに現れた呪術の原理に関する語りを示し、3章では上記用語によって媒介される超心理学、「ニューエイジ」などの概念とのかかわりについて述べる。それをふまえて4章では、現代において呪術が説得性を得るメカニズムを明らかにする。分析の中心となるのは、現在ロシアの書店で販売されている呪術の「実用書」、新聞広告、及び2002年8月、2003年7～8月に筆者が行った調査資料である。重点的に調査を行ったのは、西にフィンランドと国境を接するロシア連邦カレリア共和国――うち、首都ペトロザヴォーツク及び周辺の村、プードシ地区ヴォドロゼロ地域の村――である。さらに、カレリアの東に位置するアルハンゲリスク州の小都市オネガ及び周辺の村、カレリアの南に位置するロシア第二の都市ペテルブルグでも調査を行った[5]。

3　浜本満『秩序の方法』弘文堂、2001年、383-384頁。

4　『文化人類学辞典（縮刷版）』弘文堂、1994年、354頁。

5　調査資料を引用する際は参考までに、脚注の［　］内にインフォーマント名、生年、性別、居住地、職業、採集年、採集地その他を示す。呪術というテーマの性格上、プライバシーを配慮し、インフォーマント名は原則として仮名、または姓なしで名前のみ記載している。

なお、本稿でいう「呪術」とは、①英語のmagicに相当するmagiia、②koldovat'（呪術をかける）を語根とするkoldovstvo、③呪術、魅惑を意味するchary、④vedat'（知る）を語根とするvedovstvo、⑤やはり「知る」を意味するznat'を語根とするznakharstvoなどの訳語である。これらの語は「科学的」な呪術の語りにも用いられているが、その内容は後述するように大きな変化を遂げた。革命前の資料から「伝統的」な呪術を定義すれば、それは何らかの目的を達成するために、超自然的な存在、霊力、言葉の力を借りて行われる行為である。①〜⑤は基本的に人類学でいう「呪術」の概念にあてはまり、同種の行為を指す言葉のバリエーションとみなせるので、本稿ではあえてすべて「呪術」と記すこととし、引用の際は原語で記す。呪術を行う者を指す言葉には、①〜⑤に対応して①mag（男）、②koldun/ koldun'ia[6]、③charodei/ charodeika、④vedun/ ved'ma、⑤znakhar'/ znakharkaなどがある。これら「呪術」を知る者はすべて、本文では仮に「呪術師」とし、引用では原文どおりに記すこととする。

1.「伝統的」な呪術の語り—革命前の民族誌資料より

本章では「科学的」な呪術の語りとの比較のために、呪術を説明抜きの自明のものとして扱う「伝統的」な語りを概観したい。「科学的」な語りにおいては特に、呪文（zagovor）、呪い（porcha）、邪視（sglaz）が詳細に説明されるが、これらは「伝統的」な語りで使われてきた言葉であった。言葉の中身の変化を追うために、本章では上記3語、及び呪術師についての「伝統的」概念を見ていく[7]。

前述したように、現在ロシアにおいては、「伝統的」語り、「科学的」語りのどちらも存在する。しかし、ここで「伝統」を記述するにあたっては、「科学的」な語りが呪術の当事者によってはまだ行われていなかった革命前の民族誌、特に19-20世紀初頭におけるロシア人を対象とした民族誌を資料とする。地域は特に限定しない。「科学的」語りを行ったり、新聞・書籍などのメディアを通じて呪術を広めようとしたりする呪術師が「ニセモノ」であると非難され、ロシアにおいて民族学の研究対象とされていないのが現状であるのに対し[8]、「伝統的」な呪術に関する資料は膨大である。以下に示す事例はほんの一例にすぎず、無数のバリエーションが存在することをあらかじめお断りしておく。

1.1. 呪術師

「ほとんどの村に一名ないし数人のkoldun、ved'ma、znakhar'がいる[9]」という記述があるが、呪術師は人々にとって身近に存在する者であった。彼らが何をする者なのかについて、19世紀に記された民族誌には、「koldunやved'maは人々を病気にし、人間関係を損ね、

6 男性形 / 女性形の順で示されている。以下同様。
7 今回はあくまで新タイプの呪術の語りと対比させることが目的なので、より詳しい呪術の「伝統」の紹介については今後の課題としたい。
8 藤原潤子「現代ロシアにおける呪術の媒体とその機能…」、前掲書。
9 D. N. Ushakov, "Materialy po narodnym verovaniiam velikorussov," *Etnograficheskoe obozrenie*, Kn. 29-30, No. 2-3 (M.: 1896), p. 165.

家畜をやつれさせ、雌牛からミルクを盗み、穀物の豊饒性を奪う[10]」、「znakhar'/ znakharka とは、邪視を取り除いたり、あらゆる呪いを祓ったり、紛失物を探し当てたりする人を指す際に、現在最もよく使われる言葉である[11]」、などとある。koldun や ved'ma は尻尾を持つ、または動物や鳥、物に変身する能力を持つとも信じられた[12]。koldun と znakhar'は、信仰から背を向けている / 敬虔なキリスト教徒である、呪いをかける / 呪いを祓う、という正反対の対立項としてとらえられることもあるが[13]、混同されることも少なくない[14]。双方とも呪術を知るという点では共通するからである。呪術師とは総じて言えば、超自然的力を操る、または超自然的なものと人間とを媒介する知識を持つとされる者であり、その知識によって、敬われると同時に恐れられる存在である。

1.2. 呪文

呪文とは何かを追求した研究の代表的なものとして、N. ポズナンスキーの『呪文』がある。1913年に書かれ、1917年に公刊されたこの本は、革命前の呪文研究の集大成といえる。彼によると呪文とは、要求されるすべての条件を満たした場合に何らかの結果を生じさせることができ、chary以外の方法では自然の掟も個人の意思も決してあらがうことが出来ない、と信じられている唱えごとである[15]。ここにある「すべての条件」が具体的に何を指すかに関しては、個別の民族誌に記述されている。「民衆が信じるところによると、この言葉の力は言葉自体と、言葉を唱える時間に存在する[16]」、「もしも言葉だけでなく魂から正しく呪文を唱え、その際、定められたすべての条件を守り、密かに伝えられた通りの動作を行うことができるなら、その人は望みをかなえることができると信じられている[17]」などとされる。革命前に印刷された呪文は学術目的のものに限られるが、その代表的なものとしては、I. サハロフの『ロシア民衆の言い伝え』[18]、L. マイコフの『大ロシアの呪文』[19]、N. ヴィノグラードフの『呪文、魔除け、救済の祈り他』[20]、M. ザブィリンの『ロシアの民衆』[21]などを挙げることができる。呪文は多くの場合、唱えるべき時、場所、方角、何に向かって唱えるか、唱える回数、その際の声色、呪文に伴う所作、禁忌などについての規定を伴う。「伝統的」には呪文は、呪術師から後継ぎの呪術師にのみ伝えられるものであった。これについては例えば、以下のような記述がある。すなわち、「農民が信じるところによると、呪文は死に際

10 Ushakov, "Materialy po narodnym verovaniiam...," p. 169.
11 V. B. Dal', *O poveriiakh, sueveriiakh i predrassudkakh russkogo naroda* (SPb.: Litera, 1996 (1880)), p. 22. カッコ内の年号は初版年（翻訳の場合は原著発行年）。以下同様。
12 Ushakov, "Materialy po narodnym verovaniiam...," p. 168.
13 M. Zabylin, *Russkii narod: ego obychai, obriady, predaniia, sueveriia i poeziia* (M.: Kniga printshop, 1990 (1880)), p. 221.
14 Ushakov, "Materialy po narodnym verovaniiam...," p. 414.
15 N. Poznanskii, *Zagovory* (M.: 1995 (1917)), p.102.
16 Zabylin, *Russkii narod...*, p. 289.
17 Dal', *O poveriiakh, sueveriiakh...*, pp. 34-35.
18 I. P. Sakharov, *Skazaniia russkogo naroda* (M., 1989 (1836)).
19 L. N. Maikov, "Velikorusskie zaklinaniia," *Zapiski Imp. Russkogo geograficheskogo obshchestva po otdeleniiu etnografii*, T. 2 (SPb.: 1869).
20 N. Vinogradov, *Zagovory, oberegi, spasitel'nye molitvy i proch.*, Vyp. 1-3 (SPb.: 1907-1910).
21 Zabylin, *Russkii narod....*

に差し向かいで、近親者の誰かに伝えられる。呪文は絶対の秘密で、伝えられた者もまた、死ぬまで呪文の秘密を守る[22]」。他人に明かしてはいけない理由は、「呪文をおおっぴらにしゃべってしまうと、呪文を唱える力は失われ、力の失われた呪文だけが残される[23]」と信じられたからである。

「伝統的」な観念において、呪文の効力は言葉そのもの、それに伴うあらゆる決まりごと、その秘密性にあるとされている。これらの規定を守れば、超自然的な力が発動し、望みをかなえることができるのである。

1.3. 呪い、邪視

「呪い（porcha）」という言葉は、「こわす、傷める、傷つける、損なう」を意味する動詞「portit'」を語根に持つ。病気にする、死をもたらす、新婚夫婦や家畜、農作物の豊饒性を奪うなど、呪術のうちでも他人に不幸をもたらす行為が呪いである。いかにして呪いをかけるかについては、1章2項の「呪文」の部分で挙げた文献をはじめとして、多くの資料がある。また、呪いをかけられたことに関する語りも少なくない。しかし、なぜその言葉を唱え、その行為を行えば呪いをかけたことになるのかについての説明はない。あえて挙げれば、次のような説明があるのみである。すなわち、「呪いとは意識的な行為や邪悪な人間の意志の表れであるばかりでなく、ほぼすべてが悪魔的な力の発現の結果である。呪いを行う邪悪な人間は魔物の手先なのである[24]」。呪いは人間の邪悪な意志、または魔物の力で引き起こされるものであるとされている。その際、呪文は邪悪な意志を実現させるための、またそのために魔物を従わせるための手段となる。

邪視については、以下のように説明されている。「邪視による呪いとは、本人の邪悪な意図によって引き起こされるのではなく、何を見ても、何も意識しなくても他人に害を与えてしまう、その人の生得的な力によって生じるのである[25]」。邪視とは、「邪悪で意地が悪く狡猾な人の視線には毒が含まれており、それが病を引き起こすかのようにみなす民間の信仰」が東方からロシアに伝わったものである[26]、との記述もある。呪術師が特に強い邪視を持つとされることがあり、「一瞥しただけで人間を憔悴させたり狂わせたりすることのできるkoldunがいる[27]」などと信じられた。ロシアの邪視について日本語で詳しく論じられたものには伊東一郎の論考があるが、それによると邪視とは一種の「他者の妬みの眼差し」である。新生児や妊婦、花嫁らが最も邪視されやすいとされるが、それが人生の最も幸福な時期であり、それゆえ最も妬みを受けやすいと考えられたからである[28]。しかし、なぜ妬ましいという気持ちで見つめると害を与えることになるのかについての内在主観的な説明は、革命前の資料には見当たらない。

---

22 G. Popov, *Russkaia narodno-bytovaia meditsina* (SPb.: 1903), p.59.
23 Dal', *O poveriiakh, sueveriiakh...*, p. 35.
24 Popov, *Russkaia narodno-bytovaia meditsina*, p.41-42.
25 Popov, *Russkaia narodno-bytovaia meditsina*, p. 36-37.
26 Sakharov, *Skazaniia russkogo naroda*, p. 104.
27 Popov, *Russkaia narodno-bytovaia meditsina*, p. 35.
28 伊東一郎「ロシア民話と民間信仰：邪視の文化史」、藤沼貴編著『ロシア民話の世界』早稲田大学出版部、1991年、61頁。

2.「科学的」な呪術の語り

現在ロシアにおいて、呪術を信じない人に信じさせようとする試みはさかんに行われている。あるznakhar'が自らの著書で行った告白によると、彼は唯物論・無神論教育のせいで以前は呪術を信じていなかった、しかし現在では無神論的世界観を「克服」したという。そして、読者にも世界観を変えるよう呼びかけている[29]。また、ロシアの詩人レールモントフが27歳の時に決闘で死んだこと、エセーニンの詩に死のモチーフが現れていること、ケネディ大統領が殺されたこと、モーツァルトが若くして死んだことなどを「証拠」として、呪術の実在性を読者に「証明」する者もいる[30]。以下に示す呪術の原理に関する語りも、呪術の実在性を「証明」しようとするこのような流れの一部である。

「伝統的」な呪術においては、超自然との媒介を助けるものとして、呪文の神秘的な力が無条件に信じられていた。しかし、合理的思考の持ち主であることを自認し、呪術は信じないとする者は、神秘性だけでは納得しない。別の説明が必要になるが、それは呪術の非論理的な恣意性を覆い隠すものでなければならない。そこで登場したのが、「科学」をよそおった語りである。「科学的根拠」を示そうとする場合に頻出するのが、「エネルギー(energiia)」、「エネルゲチカ (energetika)」、「バイオフィールド (biopole)」、「インフォメーション(informatsiia)」、「コード(kod)」、「コード設定(kodirovanie[31])」、「プログラム(programma)」といった用語である。これらに注意を払いつつ、呪術のメカニズムに関する説明を見ていきたい。書籍については分かる限りにおいて、発行回数とロシアで記載が義務付けられている発行部数も合わせて記すことで、その広がりの一端を示す。参考までに述べると、ロシア出版界ではここ5年間で平均発行部数が約1万部から7千5百部にまで落ち込んでいる[32]。ロシア連邦の人口は、日本の約1割増の1億4千5百万人である。

呪術の「実用書」の著者のうち、「科学的」に呪術を語る者には、書籍やフィールドワークによって呪術知識を得た者が多い。『邪視・呪いといかに戦うか』(2003年1万2千部)の著者M.メシャロヴァも同様で、彼女はmag、znakhar'、koldunなどから話を聞いてこの本を執筆している。邪視や呪いは完全に現実のものである[33]と語る彼女は、呪術について以下のように説明している。

> 太古の昔から知られていることですが、人間の強い思念や意思は奇跡を起こすことができます。すべての民族にmagiia――他人のバイオフィールドや無意識領域に精神エネルギーにより作用を起こすこと――は存在していました。今日、精神的緊張がみなぎる社会において、意識的または無意識に他人を害する人々は少なくありません。もしもネガティヴな感情が集中すれば、他人のバイオ

29　A. Aksenov, *Universal'naia kniga znakharia XXI veka* (M.: 2001), p.6.
30　A. Morok and K. Razumovskaia, *365 zagovorov i retseptov na istseleniie* (M.: 2001), pp. 286-294.
31　「暗示」という訳も可能。現在ロシアでアルコール中毒や麻薬中毒の治療などのためにさかんに行われている暗示療法をも意味する。しかし、kodirovanieは人間だけでなく物質に対しても行われるため、直訳で「コード設定」とした。
32　*Ezhenedel'nyi zhurnal*, №095, 2003.11.01, 16:45. http://www.ej.ru/［2003年11月1日参照］
33　E. Mesharova, *Kak protivostoiat' sglazu i porche* (SPb.: Nevskii prospekt, 2003), p. 10.

フィールドを変形させたり穴をあけたりすることになります。つまり、民間で邪視と呼ばれている行為を行うことになるのです。もしも送られた思念が感情レベルにおいて強力であれば、バイオフィールドにより深刻な打撃を与える、つまり呪いをかけることになります[34]。

magiia、邪視、呪いがバイオフィールド（後述）、エネルギーといった言葉で説明されている。彼女の説明では、magiiaとは精神エネルギーによって他人のバイオフィールドを変形させることであり、その程度が軽ければ邪視、強ければ呪いである。他に、邪視や呪いは「エネルギー的ウィルス」である[35]、と医学用語を用いて説明する者もいる（V.トラヴィンカ著『健康への小道』1995年5万部、1997年部数不明、1999年4万部、同2万部、2000年部数不明、2001年2万部、2003年2万部）。

呪術は何らの物を介して行われることも多い。呪術をかける際には卵、塩、蝋燭、水が「伝統的」にさかんに使われるが、なぜそれらが適しているのかについても詳しく説明される。以下は、A.セミョーノヴァ著『家の浄化：邪視、呪い、あらゆる不幸からの防御』（2000年部数不明、2001年部数不明、2002年1万5千部、2003年部数不明）からの引用である。著者は中国の風水を取り入れつつ、ロシアの「伝統的」呪術の活用を説く女性である。以下、治癒の呪文を込めた水を病人に飲ませて回復させる、または呪いの呪文を込めた食べ物・飲み物を誰かの口に入れさせることで病や不幸をもたらす――このような呪術についての説明と思って読んでいただきたい。

卵、塩、蝋、水、砂糖その他は、インフォメーションをよく吸収・保存する性質を持っています。それらをチャージすること、つまりそれらに呪文を唱えることは、エネルギー光線から成るインフォメーション・コードを設定するという考えに基づいています。それによってインフォメーションは移動し、チャージされた物質の構造に組み込まれるのです。

例えば、液体（水、卵白、卵黄）に組み込まれたインフォメーション・コードは10日近く、塩なら2～3週間、蝋なら半年かそれ以上有効です。

液体や塩は、人間の体に入ると盛んに代謝のプロセスに参与し、人間の無意識領域にインフォメーション・コードを書き込みます。人のオーラの中に蝋を置いた場合、蝋はプログラムを神秘的・心理的レベルで微細な構造、つまりバイオフィールドの中に定着させていきます。インフォメーション・コードの実現は液体や塩の場合よりも遅くなりますが、効果が劣るわけではありません[36]。

上記で呪文は、プログラムされたインフォメーション・コードと言い換えられている。人体に入り込んだインフォメーション・コードがプログラムとして作動する――これが呪文の作用のメカニズムである。プログラムというコンピューター用語が入っているところがポイントである。呪文の「有効期限」まで述べられており、実に詳細かつ「科学的」な記述となっている。

34 Mesharova, *Kak protivostoiat' sglazu i porche,* pp. 47-48.
35 V. I. Travinka, *Tropinka k zdorov'iu* (SPb.; M.; Khar'kov; Minsk: Piter, 2002), p. 11.
36 A. Semenova, *Ochishchenie doma: zashchita ot sglaza, porchi i vsiacheskikh nedugov* (SPb.: Nevskii prospect, 2002), pp. 40-41.

筆者のインフォーマントで自称治療師[37]、他称超能力者・koldun'iaであるカレリア人[38]のナジェージダ・ニコラエヴナの説明によると、「呪文は7週間、49日間は自動的に作用する」。呪いによる病気の治療を行う際、彼女は自らの左眼から発する「レーザー光線」で呪いを焼き尽くすのだと語った。治療を行うと、呪いは患者の左肩から煙のように出て行く。暗いもの（呪い）が体から出て行き、明るいもの（レーザー光線）がそれを消し去る。そのプロセスは中和であるという[39]。

新聞には連日、呪術師たちの広告が掲載されているが、限られた字数の中でもやはり、上記の用語が多用される。特にこの種の広告が多いのが、イエロージャーナリズムに分類される新聞と、各戸に無料で配られる広告紙である。一例を見てみよう。以下は、「超心理学プロフェッショナル」で「現在活躍する多くのmagの師匠」で、かつ「ロシア最強のkoldunであるB.V.ブリャンスキー」による広告である。

> ビジネスと私生活における最大限の成功を開きます。幸運のパーソナル・コードをセットします。（新聞『マヤー・セミヤー』2003年4月№13より）

また、「プロフェッショナルmag」であるイリヤ・ゲルマンは、次のように宣伝する。

> 7日であなたの夫と愛人の仲を裂き、永遠に家庭に取り戻します。愛する人はあなたの思いのままに。100%貞節のコードをセットします。（『エクスプレス新聞』2003年4月№14より）

このような専門用語は呪術師からだけでなく、健康に関する日常的な語りとして、一般の人々の口からも出てくる。ある女性は、筆者と共に蒸し風呂（バーニヤ）に入った後、風呂に入ることの意味について、こう言った。「風呂に入れば、水が悪いインフォメーションを取ってくれるの。だから、仕事の後とかトロリーやバスに乗った後は、必ずシャワーを浴びた方がいいわよ。そうすれば余計なインフォメーションが落ちるから。悪いインフォメーションは良いのよりすばやく入り込んでくるの。気分的なものとして入ってきたり、皮膚から入ってくることだって。ぺったりくっついてくるのよ[40]」。彼女にとって世界は、様々なインフォメーションの渦巻く場である。悪いインフォメーションが体内に入れば、それは体や精神に異常をきたすのである。

また、「隣に住むkoldun'iaのせいで夫が飲んだくれる」と愚痴る女性は声をひそめて、「あの女はエネルギー的吸血鬼なのよ[41]」と言った。エネルギーを吸い取った側はそれを体に満

37　ロシア語ではtselitel'/ tselitel'nitsa。呪術または超能力その他によって治療を行う者。

38　カレリア共和国の人口構成は、ロシア人73.6%、カレリア人10.0%、ベラルーシ人7.0%、その他9.4%（1989年現在）。カレリア人がジプシーと並んで強い呪術的力を持つと信じる人は多い。「カレリア人は全員呪術師だ」というような極端な発言も時に聞かれる。

39　［ナジェージダ・ニコラエヴナ、1956年生まれ、女性、ペトロザヴォーツク在住、元設計技師、2002年ペトロザヴォーツク採集］

40　［イリーナ、1955年生まれ、女性、プードシ在住、体育教師、エアロビクス・インストラクター、2003年ヴォドロゼロ地域コルゴストロフ村採集］

41　［ヴァレンチーナ、1949年生まれ、女性、オネガ在住、元幼稚園教諭、2002年オネガ採集］

たし、若さと健康を維持する。一方、吸い取られる側は、病気になったり自制心を失ったりする。「エネルギー的吸血鬼」は、定期的に他人を犠牲にしてエネルギーを吸い取るとされているのである。

エネルギー自体が何らかの性質を持つとされることもある。ある敬虔な男性キリスト教徒によると、「邪視は悪いエネルギー、お祈りは良いエネルギー[42]」だという。世界は様々なエネルギーがぶつかりあう場としてとらえられている。

ここまで、書籍、新聞広告、及び人々の生の語りを見てきた。これらの例から呪術に関する「伝統的」な用語と、それについての「科学的」な説明を示すと、以下のようになる。

邪視・呪い：他人のバイオフィールドに異常を与えること、邪悪なエネルギー、エネルギー的ウィルス、エネルギー的ヴァンピリズム、悪いインフォメーション。

呪文：コード、インフォメーション、プログラム。

呪文を唱えること：コード設定、プログラムを与えること。

この対応を見る限りでは、言葉が置き換えられたにすぎず、結局何の説明にもなっていないように見える。しかし、実はこれらの言葉は、「伝統的」な呪術にはなかった概念・イメージを媒介しており、「伝統」とは違う方法で呪術の論理を支えている。では、「エネルギー」をはじめとする用語は何から借用されたのだろうか。それは3章で見るように、超心理学、東洋思想、またはそれらを含む「ニューエイジ」の信仰からである。

なお、念のために付け加えておくと、古い民族誌にも邪視や呪文について合理的に解釈しようとする試みは見うけられる。19世紀の研究者I.サハロフは邪視信仰について述べた後、「わが国の民衆にはまだ、目によるメスメリズム（動物磁気催眠術）の概念がないのだ[43]」と述べ、見つめられることによって病気にかかったりするのは、催眠術のせいであると考えていることをほのめかす。また、同じく19世紀の研究者M.ザブィリンは、「邪視は視線の磁力とも考えられよう[44]」と述べている（ただし言下にその可能性を否定している）。またG.ポポフは、呪文は一般にznakhar'による暗示、または自己暗示であると述べ、呪いや邪視に関しても同様であると述べている[45]。このように合理的に解釈しようとする姿勢は、現在「科学的」に呪術を語る者らの姿勢とある意味で近い。しかしサハロフらの見解はあくまで、呪術を信じない研究者側の観察者としての見解であり、呪術を信じ、実践する当事者の見解ではない。実践者自らが「合理的」な説明をしようとする、それが「科学的」に呪術を語るニュータイプの呪術師たちの特徴なのだ。

---

42 ［ニコライ、1948年生まれ、男性、ペトロザヴォーツク在住、テレビディレクター、テノール歌手、2003年ヴォドロゼロ地域ヴァリシペルダ村採集］

43 Sakharov, *Skazaniia russkogo naroda*, p. 104.

44 Zabylin, *Russkii narod...*, p. 261.

45 Popov, *Russkaia narodno-bytovaia meditsina*, pp. 64, 66.

3．呪術と他の文脈との交差

3.1. 超心理学と呪術

ロシアで最も有名な超能力者のひとりに、ジューナ・ダヴィタシヴィリがいる。彼女はブレジネフを治療したとされ、「クレムリンの治療師」とも呼ばれる「アッシリア人」超能力者である。その履歴は、現在呪術の語りで多用される「バイオフィールド」と深く関わるので、本人のホームページから略歴を紹介する。

1949年、クラスノダール地方クバンに生まれる。子どもの頃はznakharkaであった曾祖母の治療をいつも見ており、真似をして治療行為をしたこともある。大学卒業後、グルジア共和国の首都トビリシに住むようになり、植物が発する放射線の研究者と知り合う。それに関連して動物が発する放射線の研究に夢中になり、自分自身をも研究対象とするようになる。その結果、人間も生物物理学的な放射の源であり、その放射線が病気の治療に役立つことを理解する。方法論を深めるため、医大に入り、のちに医者として働くようになる。その間も研究を続け、学界で注目を集めるようになる。70年代終わりにモスクワで、物理学、遺伝学、生化学などにかかわる秘密国家プログラムが開始されるが、これはジューナの手から発せられるバイオエネルゲチカの研究であった。実験結果から、彼女のバイオエネルゲチカには驚くべき効果があることが明らかになった(46)。

ここで使われている「エネルゲチカ」という語は一般に、「エネルギー生産体制、エネルギー経済論、（理学用語として）エネルギー論、動力設備（例えば発電機）」などと訳される言葉であるが、ここでは「エネルギー発生源」のような意味と考えてよいだろう。「エネルゲチカ」から発せられた「エネルギー」の及ぶ範囲が「バイオフィールド」である。ジューナはバイオフィールドについて、次のように説明している。「人間を含めたすべての生命有機体のまわりには、バイオフィールドというものがとりまいています。私たちのような超感覚の持ち主は、それをきわめて容易に感じ取ることができます。このバイオフィールドは、個々の有機体の物理的、または精神状態によってさえも変化します(47)」。

バイオフィールドの形が人の物理的・精神的状態によって変わるとするジューナの考えは、邪視・呪いをバイオフィールドの異常とする前述の語りと完全に重なる。なぜなら、邪視・呪いの結果、病気にかかったり精神状態に影響が出たりするとされるからである。「科学的」に呪術を語る呪術師たちは、ジューナに代表される超心理学の概念を借用し、利用している。用語借用の効果は明らかで、それによって呪術は、以下に述べるような超能力の「科学性」をまとうことに成功するからである。

ソ連で軍事利用を目的とした超能力研究が密かに行われているのではないかという噂は、1960年代からささやかれていた(48)。ジューナの話を含めたこの種の噂の集大成が、アメリカ人ジャーナリストM.エボン著『サイキック・ウォー：恐怖のソビエト心霊兵器』である。

46　http://www.djuna.ru/stat.htm［2003年7月9日参照］

47　*Ogonek*, 1981, №17 (2806), p.28-30.

48　志水一夫「機密文書が語る“米ソ超能力戦争”の全貌」『歴史読本』臨時増刊『世界謎の奇跡と大予言』新人物往来社、1984年、200頁。

本書に書かれていることのすべてが真実かどうかは定かではないが、それはここでは重要でない。重要なのは、ソ連国内にそういう噂が広まっていたかどうかである。エボンの著書にはジューナにまつわる話の他に、ノヴォシビルスクの学術都市（アカデムゴロドク）で1966年から超心理学の研究プロジェクトが開始されていた、という話も掲載されている[49]。ノヴォシビルスク大の卒業生に尋ねてみたところ、確かにそういう研究は行われていたとのことだった。噂は他にもある。ペテルブルグにある科学アカデミー脳研究所では、以前も今でも、超能力か何か良く分からない研究が行われているという。政府が超心理学を「科学」として研究しているという噂は、ソ連で広くささやかれていたのである。

超能力の実在性を期待する雰囲気は、以前も今もロシアにある。おそらく80年代後半のことと思われるが、「カシュピロフスキーがテレビに出た時は、みんなバケツに水を入れてテレビの前に座ったよ」という話はよく聞く。A. カシュピロフスキーとは、有名な男性超能力者である。テレビ画面を通して彼のエネルギーが水にチャージされ、万病に効く聖水になる、というような触れ込みだったらしい。バケツではなく、病人をテレビの前に引きずっていったという人もいた。

印刷物を読んで自分の可能性を試そうとする人も少なくない。現地調査で出会った男性セルゲイは、1993年に新聞に掲載されていた方法を試したことがきっかけで超能力者になったという。その方法とはダウンジング[50]で、イエス・ノーで答えられるすべての質問に対して正しい答えが得られるので、行方不明者捜索の際には、警察から協力を要請されるとのことである[51]。さらに、2003年に調査した際、数人のインフォーマントから、少なくともモスクワ、ペテルブルグ、ペトロザヴォーツク、ムルマンスクには超能力者養成学校、または不定期の養成コースが存在することを聞いた。そこに通った人、通いたいと思っている人にも数人会った。新聞には連日、養成学校の広告が出ている。

ブレジネフを治療した前述のジューナは、「超能力者」と呼ばれるのは好まず、自身を医者とみなしている[52]。また、バイオフィールドは物理的現象であって、「神秘とは全く関係ない[53]」とも言っている。当事者が神秘でも超能力でもないとみなす超心理学――その語りとつながることにより、呪術の語りは「科学的」自明性をよそおう。超常現象は現代科学では証明不可能だが、実際には科学的根拠があるのでは、と考える人々の期待をも呪術に取り込むのである。「バイオフィールド」をはじめとする用語の共有により、近年、超能力と呪術は非常に接近しているといえるだろう。

両者の近さは用語レベルだけではない。「血筋」においても近い。超能力者はしばしば、自分が「伝統的」な koldun/ koldun'ia や znakhar'/ znakharka の子孫だと語る。すでに述べたように、超能力者ジューナの曾祖母はznakharkaであった[54]。先述のダウンジング超能力

49 マーチン・エボン『サイキック・ウォー:恐怖のソビエト心霊兵器』、近藤純夫訳、徳間書店、1984（1983）年、186-196頁。
50 振り子（糸の先にナットをつけたもの）の揺れによって占う方法。
51 ［セルゲイ、1953年生まれ、男性、オネガ市レゴシェフスカヤ村在住、溶接工、2002年オネガ市レゴシェフスカヤ村採集］
52 http://www.djuna.ru/stat.htm［2003年7月9日参照］
53 http://www.djuna.ru/stat1.htm［2003年8月29日参照］
54 http://www.djuna.ru/stat.htm［2003年7月9日参照］

者セルゲイの亡き母は、近所で子どもが生まれた際には病気除けの呪文を唱えに行っていたという。また、呪術を行う者と超能力者の間の「知識」の授受も見られる。前述のカレリア人超能力者ナジェージダ・ニコラエヴナは、「シベリアの koldun」が彼女のために特別に作ってくれた呪文を所有していると語った[55]。このように、呪術と超能力は一続きのものと認識されつつあるのだ。

3.2.「ニューエイジ」と呪術

ここまで呪術と超能力の関係を見てきた。ところで一般に超能力信仰は、1960年代にアメリカで起こり、世界に広まっていった「ニューエイジ運動」と深くかかわる[56]。ニューエイジ運動がいつロシアに登場したかであるが、90年代初め、外国からの宗教の解禁に伴ってのことである、とする説がある[57]。確かに、「ニューエイジ」系の本が大量に印刷されるようになったのは90年代以降である。しかし、実際ロシアに入ったのはそれ以前である。西側の著作は匿名で訳され、コピーが回し読みされた。また、ロシアの思想家・詩人D.アンドレーエフ（1906-1959）[58]、ロシアの神秘思想家・霊媒師E.ブラヴァツカヤ（1831-1891）[59]や、チベット探検を行ったリョーリヒ親子[60]の著書も読まれていた[61]。

「ニューエイジ」信仰の特徴のひとつとして挙げられるのが、「輪廻転生とカルマの法則[62]」である。ロシアでは現在、カルマ論を扱った本が目につく。題をいくつか挙げると、S.ラザレフ著『カルマの診断法』[63]（2003年現在全8巻。1巻初版は1993年。現在までほぼ毎年再版されており、うち発行部数が明らかなのは、2001年及び2003年の各2万5千部。他の巻も同様にほぼ毎年再版されている。2001年発行の7巻、2003年発行の8巻は初版10万部。各巻10万部以上は発行されていると思われる。一部の巻は著者の公式サイト[64]で読むことができる）、G.マラーホフ著『カルマの治療：人生と運命と健康について』[65]（2001年1万

55 ［ナジェージダ・ニコラエヴナ、前掲に同じ、2002年ペトロザヴォーツク採集］

56 島薗進によると、ニューエイジの信仰に共通する特徴は、「自己変容」の追求である。彼はニューエイジ信仰の特徴を19項目にまとめ、そのひとつとして、「超常的感覚や能力の実在――人間は皆、潜在的に超常的な感覚や能力を発揮する可能性をもっており、意識変容の修練によってそれは可能になる」を挙げている：島薗進「新霊性運動・ニューエイジ・精神世界」『新宗教時代』5、大蔵出版、1996年、167-181頁。

57 *Provintsional'noe agenstvo novostei*, 2000.10.26. http://www.pan.ru/［2003年8月27日参照］

58 反ボリシェヴィキ作家レオニード・アンドレーエフ（1871-1919）の息子。1947年に妻と共に逮捕され、禁錮25年を言い渡されるが1957年に釈放。監獄で自らの精神体験を記した『世界の薔薇』を執筆。現在この署名はペテルブルグにある「ニューエイジ」系書店の店名にもなっている。

59 ブラバツキーとも表記される。ニューヨークの神智学協会の設立者。チベットの奥地に存在するといわれる仏教徒のユートピア、シャンバラの賢者マハトマからの使命と称して神智学運動を行う。主著は『ベールをぬいだイシス』（1877）、『神秘教義』（1888）。

60 N.リョーリヒ（1874-1947）。レーリヒとも表記される。ロシアの画家、神秘思想家、探検家。チベット密教に深く影響され、東洋の神秘思想を寓意的に表現した無数のテンペラ画を製作。シャンバラ思想を展開し、ソ連とアメリカの和解と心霊的な世界連邦樹立を目指して活動した。著書は『アルタイ―ヒマラヤ』（1929）。息子ユーリー（1902-1960）はチベット学者。著書は『内奥アジアへの旅』（1931）。

61 http://incart.spb.ru/~ikv/meta/russian/texts/angel.htm［2003年8月29日参照］

62 「人間の魂は死後も存続し続け、この世に再生してくる。再生するまでの間、別の次元に存在し、この世とも交流することがある。また、カルマは前世から現世へ、現世から来世へと受け継がれていく」とされる（島薗進「新霊性運動・ニューエイジ・精神世界」、前掲書、176頁）。

63 S. N. Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 1-8 (SPb.: 1993- 2003).

64 http://www.lazarev.ru/index.html［2003年8月27日参照］

65 G. Malakhov, *Istselenie karmy: o zhizni, o sud'be i zdorov'e* (SPb.: Nevskii prospeckt, 2002).

部、2002年1万5千部)、A.スヴィヤシ著『カルマ:間違いを直しましょう』[66](1999年5万部、2001年5万部、同3万部、同2万部、同1万部、2002年5万部、2003年部数不明)、A.バラシ著『健康のエネルギーセラピー:カルマと未来』[67](2001年2万5千部)など。「マラーホフは健康についての科学的な本よ」とペテルブルグに住む知人が言うのを聞いたが、カルマ論は健康になるためのハウツーのような雰囲気で日常に溶け込んでいる。

3章1節で現代の呪術が超能力と結びついていることを述べたが、さらにカルマ論とも密接に結びついている。以下、70年代にブラヴァツカヤを読んで大きな影響を受けた[68]というラザレフの著書『カルマの診断法』を見ていこう。彼はロシアにおけるカルマ論の第一人者で超能力者である。まず、身体観であるが、彼によると、「人間というのは非常に複雑なインフォメーション・エネルギー・システムです。システム中、物理的肉体と意識が占めているのは数パーセントにすぎません。95〜98パーセントは、宇宙と同じくらい謎に満ちた、無意識のインフォメーション・エネルギー層から成っているのです[69]」。このような身体観に基づき、彼は掌を使って病気治療を行う。掌でエネルギー層を感じ取ることによって診断し、自らの手から発するエネルギーで治療するのである。また、遠くから思念を送ることによる治療も行う。治療行為を通して、彼は1990年に次のようなことに気づいたという。

> 治療の過程で、患者の性格、そして運命までもが目に見えて変わっていきました。変化を分析した結果、性格、運命と病気は何らかの形で関係していることに気づきました。この関係は多様な形をとります。(中略)さらに深く事実を分析した結果、健康、性格、そして人間の運命さえ、カルマの構造によって定まっているという結論に達しました。人間についてのすべてのインフォメーション及び身体状態は、フィールドにコード設定されています。さらに、フィールド構造と肉体的構造は局所的につながっており、互いに影響を与え合っているのです。人間の運命や性格もやはり、フィールド構造にコード設定されています。もしもそこに恒常的に働きかけを行うなら、多くを改善することができるのです[70]。

2章で呪文が「コード」と言い換えられていることを述べたが、新聞広告で呪術師たちが宣伝する「効果100パーセントのコード設定」とは、上記のような、バイオフィールドに書き込まれたコードの改変を意味しているのである。バイオフィールドにはカルマに関する情報が入っており、それは呪術によって書き換え可能とされる。以下の広告は、カルマと呪術の融合の例である。

> カルマ—分析!　privorot(愛させる呪術)。100%愛を取り戻します、その他。他の方法が効かなかった方、ご連絡下さい!(新聞『ツェントル・プリュス』2003年7月№26)

---

66 A. Sviiash, *Karma: ispravliaem oshibki* (SPb; M.; Khar'kov; Minsk: Piter, 2001).
67 A. Balazh, *Energoterapiia zdorov'ia: karma i budushchee* (SPb; M.; Khar'kov; Minsk: Piter, 2001).
68 Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 1, 2003(1993), p.7.
69 Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 1, p.6.
70 Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 1, p.8.

カルマとは一般に、世代から世代へ、または前世から現世、来世に続いていくものである。カルマ論と用語を共有し、呪術にカルマの観念を持ち込むことによって、呪術師はそれが、根本的・抜本的で永遠に効果が約束された治療法であるかのような印象を与えることに成功するのである。

ラザレフはまた、東洋医学の効果が認知されていることを強調し、カルマ理論はそれに準じたものであると主張する[71]。東洋医学でいう「気の流れ」は、ロシア語では「エネルギーのライン」となる。つまり現代の呪術は、超心理学、カルマ論に加えて、東洋医学とも用語を共有し、「科学的」根拠を示そうとしている。「保証つき」、「効果は100%」、「効果がなければ返金」というのが新聞の「magiiaサービス」欄の広告の常套文句だが、これを支えるには、○○すれば必ず××の結果が起こるという「科学的根拠」が必要とされるのである。

このような傾向は時に、呪術について呪術ではないと語る言説となって表れる。前述のダウンジング超能力者セルゲイと治療の呪文について話した際、彼はなぜ筆者が呪文について知りたがるのかと逆に質問してきた。「日本でロシアのmagiiaを紹介したい」と答えた筆者に対して、彼は困惑気味にこう言った。「これはmagiiaではありません。magiiaというのは、こういうのとはちょっと違います。これは他のエネルゲチカを治療目的に利用することであり、magiiaではありません。magiiaとはちょっと違うんです[72]」。彼にとって、呪文を使って治療するという行為に何ら呪術的な性格はない。それは「科学的」かつ「合理的」な行為なのである。

では、新しいタイプの呪術師たちは「科学性」のみを売り物にしているのだろうか。しかし、もしも「科学性」のみに頼るのであれば、そもそもkoldunやznakhar'を名乗る意味がない。「科学性」を強調する一方で、彼らは神秘性をも強調したがる。なぜなら、普通にはかなわぬ望み――例えば、愛人から夫を取り戻す、死ぬまで貞節を守らせる、必ず結婚できるようにする、呪いを祓う、患者の写真だけで麻薬中毒を一日で完治させる、ビジネスの絶対の成功を約束する、医者に治せない病気をたちどころに治す、運命を変える――を100%実現させると請合い、顧客を集めるには、「科学的」根拠とともに、呪術的神秘性も必要なのである。

呪術と超能力の近似性について述べた際、その「血縁関係」を述べたが、「血」は呪力の強さを宣伝するのにも使われる。「秘儀を受け継いだkoldun'ia」（新聞『ミール・ノヴォスチェイ』2003年7月8日）、「実用magiiaの世襲マイスター」（新聞『ミール・ノヴォスチェイ』2003年7月8日）など、狭い広告枠の中でも「血筋」は強調される。つまり、その「事実」は、彼らの能力の信憑性を高め、顧客・読者を増やすのに役立つ。ちなみに筆者が知り得た例のうち、最高の「血統」を持つ人物は、先に挙げたカレリア人ナジェージダ・ニコラエヴナであった。呪文を知り、超能力を持つ彼女は、8世紀から続く家系で、自分で39代目だと語った。弟子になりたいという者は5代目以上でないと取らないという[73]。このように現代の呪術は、「科学性」と神秘性という相反する要素の微妙なバランスの上に成り立っているのである。

71　Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 2, 1995, p. 3.
72　［セルゲイ、前掲に同じ］
73　［ナジェージダ・ニコラエヴナ、前掲に同じ、2003年ペトロザヴォーツク採集］

4.「科学」信仰によって復活した呪術

呪術は本来、「なぜ効くのか」という説明を必要としなかった。効くから効くのであり、特に不思議なことでさえなく、生活上の「技術」であった。現在のロシアでもそのように扱われる一方で、超能力やカルマ論などで用いられる「科学」を装った言葉でその原理が説明されるようにもなっている。説明が必要なのは、呪術の因果関係を自明のものと感じない人も現代ロシアには多いからである。

ここで、科学に裏打ちされた「知識」と迷信との関係を論じた野村典彦の研究に触れておきたい。彼は、昔からの迷信や慣習を科学に裏打ちされた「知識」で支え、納得しようとする近年の傾向について、次のような例を挙げている。日本で伝統的に冬至に南瓜を食べる習慣があるが、これは実は、日光浴不足を補うビタミンDが多量に含まれていることを祖先が体験的に習得していたからである――この場合、南瓜を食べる伝統的習慣が栄養学の「知識」によって支えられている[74]。科学的だとされる説明を聞いたとたん、思考を停止し、信じてしまう――このような傾向は、我々の日常にもごく当たり前に見られるものである。科学か疑似科学かの違いはあるが、現代ロシアにおける呪術の語りも、基本的にこのパターンに沿っている。祖先から伝えられてきた呪文が効くのは、実は呪文がプログラムとして人のバイオフィールドに作用するからである、という具合に。

現代世界において最も自明性を獲得している秩序――それは言うまでもなく科学の秩序である。「科学」に訴えることは、他のあらゆるイデオロギー的、規範体系と同じく、ある心情や行為を正当化するものとして働きうる[75]。あらためて説明を必要としていることから分かるように、現代ロシアのかなりの人々にとって、何の説明もなしに受け入れられる呪術の自明性はすでに崩壊していた。しかし、「エネルギー」をはじめとする用語の利用によって呪術の語りを「科学」の語りにスライドさせることで、すでに崩壊している「伝統的」な呪術の自明性を科学の自明性にすりかえたのである。それによって、南瓜の効用ならいざ知らず、呪いの「実在性」までも再び信じさせるに至った――逆説的なようだが、このような形での呪術の復活は、現代の「科学」信仰のあらわれに他ならない。教育程度の高い人ほど呪術を含むオカルトを信じる人の割合が高いという傾向も[76]、これを裏付けている。現代社会において「科学」の語りは、全く恣意的な呪術の因果関係さえ納得させてしまう力を持っているのである。「昔の人は呪いって言ってたけど、それは黒いエネルギーのことなのよ[77]」――こういう言葉が日常生活でさらりと出てくる。呪術は実に「科学的」に、今もロシアに存在し続けているのである。

74　野村典彦「健康に生きる：『知識』の流通と身体の自覚」『世間話研究』第10号、2000年、150頁。
75　S. J. タンバイア著、多和田祐司訳『呪術・科学・宗教』思文閣出版、1996(1990)年、27頁。
76　Kimmo Kääriäinen, “Religiousness in Russia after the Collapse of Communism,” *Social Compass* 46-1 (1999), p.37.
77　［イリーナ、前掲に同じ］

おわりに

「科学的」に呪術を語る呪術師は、ロシアのニューエイジャーの一端に位置するといってよいだろう。アメリカのニューエイジャーは、ヨーガ、気功術、インドで見出されたJ.クリシュナムルティ、K.カスタネダに紹介されたヤキ・インディアンの呪術師[78]など、もっぱら他者の文化に自己探求の方法を求めた。ロシアのニューエイジャーも同様に、他者の文化に神秘性を感じ、その方法を学ぼうとしている。しかしロシアでは同時に、政権によって長らく沈黙を強いられた自己の伝統――つまり「伝統的」な呪術――とも結びついた。上記カルマ論者ラザレフも、バイオエネルゲチカに到達するまでに、ロシアのあちこちを歩いてmagiia、koldovstvo、民間のtselitel'やznakhar'の手法を学んだという[79]。ロシアの「ニューエイジ」系の店[80]には、カスタネダの著書やサイババ[81]の写真と共に、ロシアの「伝統」から生まれ、姿を変えたニュータイプの呪術師の著作がズラリと並ぶ。さらに、ソコロフ兄弟の『ベロゼルスク地方の昔話と歌』[82]やB.ルィバコフ著『古代ルーシの異教』[83]、N.ヴェレツカヤ著『スラヴ古代儀礼の異教的シンボル』[84]など、ロシアの古典的な民族学・フォークロア資料、研究書までもが仲良くおさまっている。特にルィバコフの著書は、新異教主義者（neo-iazychnik）たち[85]にさかんに読まれ[86]、異教的儀礼を「復活」させる際に参照されているようである。

現在、呪術関係の書籍は広く読まれている。今回引用した書籍の半数以上は、調査中にインフォーマントから「役に立つ本」として勧められたものであった。これらの書籍や日常的な人々の語りに見られるように、「呪い」を「他人のバイオフィールドに異常を与えること」、「呪文」を「プログラム」と説明したところで、それは言葉の置き換えにすぎず、実質的な説明にはなっていない。結局、それを支えるのは「根拠のない恣意性」である。しかし、言葉が置き換えられたことにより、呪術はもう決して「蒙昧な迷信」などではなく、「科学的根拠」を持つ実践と認識されるようになる。本稿に示したような言説によって唯物論を「克服」し、呪術を信じるに至った者は、呪術の「実在性」をより強固に確信するのである。しかしこの場合、唯物論が「克服」されたというよりも、呪術が唯物論的に解釈されるようになったと言った方が近いだろう。バイオフィールドは人間の体をとりまく「実体」であり、呪文もまた、それに対して働きかけることのできる、プログラムという「実体」なのだから。

78　カルロス・カスタネダ著、名谷一郎訳『未知の次元：呪術師ドン・ファンとの対話』講談社、1993年。

79　Lazarev, *Diagnostika karmy*. T. 1, p.7.

80　例えばペテルブルグの《世界の薔薇》、ペトロザヴォーツクの《ルナ》。前者については以下を参照のこと: 藤原潤子「現代ロシアにおける呪術の媒体とその機能…」。

81　数々の奇跡を起こしたとして人々に聖者とあがめられているインド人。

82　B. and Iu. Sokolovy, *Skazki i pesni Belozerskogo kraia* (SPb.: Tropa Troianova, 1999 (1915)).

83　B. Rybakov, *Iazychestvo drevnei Rusi* (M.: Sofiia, 2001 (1987)).

84　N. N. Veletskaia, *Iazycheskaia simvolika slavianskikh arkhaicheskikh ritualov* (M.: Sofiia, 2003 (1978)).

85　ロシアの新異教主義とは「ロシアの真の宗教」を構築しようとする動きであり、現在、エスニック・ロシア人及びロシアに住む人々の間に見られる（V. Shnirelman, "Perun, Svarog and Others: Russian Neo-paganism in Search of Itself," *Cambridge Anthropology*, 21-3, 2000, p. 18）。

86　例えば、http://photo.pagan.ru/［2003年12月22日参照］

神秘性を失わないままに「科学性」を獲得した現代ロシアの呪術は、病気治療や家庭問題、貧困問題など、様々な問題に対する万能薬として一部の期待を集めている。と同時に、呪いの「科学的根拠」を「知った」人々が恐怖にかられ、助けを求めて多数の呪術師を渡り歩く、という現象も生んでいる。呪術の語りからは、ロシアの社会状況、人間模様が見え隠れする。今後も彼らの呪術実践を観察していきたい。

［付記］
本稿の執筆にあたっては、査読の先生方、及び高倉浩樹氏、菊池智裕氏から貴重な御意見を賜った。ここに記して心から感謝申し上げます。